

雨水利用と持続可能な防災まちづくりへの課題

東京都墨田区における路地尊型雨水利用施設の事業経緯と
維持管理について

山田 岳之

キーワード： 雨水利用、持続可能、防災、まちづくり、住民参加

1. 研究の背景

近年ヒートアイランド現象により都市部での集中豪雨が多発し、名古屋市や福岡市のように浸水する例が出ている。このような災害を防ぐうえで雨水をタンクに貯留し、下水道に流さないことは有効である。

また貯留された雨水は、震災時においてはトイレや炊事・飲料に使用できるほか、火災の初期消火や、平常時においても散水やトイレの水、洗車などで節水に貢献できる。

東京都墨田区は、前項の観点から雨水利用を進めてきており、雨水利用の先進地域となっている。この墨田区の向島地区で防災まちづくりのシンボルとして住民参加でつくられたのが雨水利用施設「路地尊」である。

墨田区では「路地尊」の設置を成功例として、同様の木造住宅密集地域である京島地区の再開発事業でも応用している。基本的な構造や機能は「路地尊」と同じである。

向島地区での防災まちづくり事業が終了して約8年が経過した。一方、京島地区では最後の雨水利用施設がつくられて約6年が経過したが、再開発事業は継続中である。

2. 研究の目的

本研究は、向島地区と京島地区で行われている雨水利用施設の維持管理の問題から、持続可能な防災まちづくりを行う上での課題を抽出し、問題の解決策と、雨水利用をひろめるための方策を提案するものである。

3. 研究の方法

まず、墨田区で雨水利用施策が導入されたプロセスを時系列的にレビューした。

向島地区と京島地区に設置された雨水利用施設が、それぞれどのように使用・維持管理されているかを、近隣の住民からヒアリング調査し、実際に施設を検分した。また向島地区の住民組織「一寺言問を災害につよいまちにする会」関係者や、京島地区のまちづくり公社職員、墨田区地域整備課からもヒアリング調査を行った。

4. 結論

向島地区では、かつて住民参加でつくられたはずの「路地尊」や雨水利用への関心が下がりつつあった。一方、京島地区では、公共事業でつくられたはずの「路地尊」（現地名は「一休」）を人々が使いはじめていた。このことは一般に言われている住民参加の効果とは違うものである。

結果、次の5点の課題が抽出された。

- ① 防災まちづくりには、住民組織だけでは限界があり、行政のサポートが必要なこと。サポートは部署の枠を超えたものであること。
- ② 住民の側にも、まちづくり組織と防災組織との連携や協力が必要なこと。
- ③ 行政の異なるセクション間の調整や、異なる住民組織間の調整を円滑に行うために、NPOなどの独立した組織の支援が必要なこと。
- ④ 新住民が安心して地域の活動に参加できるための「しくみ」が必要なこと。
- ⑤ 次の世代が防災まちづくりの歴史や、雨水を中心とする地球環境について学ぶ場を提供すること。

この5点をもとに、雨水利用拡大の方法とからめた提案を発表する。